

University
Current
Review

ISSN 0288-1748 2022(令和4)年 1月20日発行 [隔月刊]

[特集]
大学等における新型コロナワクチン接種
の取り組み

大学時報

NO.402
2022. **01**



城西大学



「松本米三郎のけはい坂の少将実はしのぶ」
大判錦絵、寛政6(1794)年



「二代目嵐龍蔵の奴浮世又平」
細判錦絵、寛政6(1794)年



水田美術館外観

水田コレクションの写楽版画

城西大学水田美術館には、創立者で清廉な政治家、熱き教育者であった水田三喜男が生前蒐集していた浮世絵を中心とする絵画からなる「水田コレクション」が所蔵されている。

本コレクションの浮世絵は、役者絵と美人画を中心に、江戸初期から幕末・明治期までの版画・肉筆画で構成されており、浮世絵の歴史を体系的に知ることが可能である。

とりわけコレクションの特色を示すのが、東洲斎写楽（生没年不詳）の役者絵版画を9点所蔵していることである。写楽は、寛政6（1794）年5月に版元蔦屋重三郎から役者大首絵28図を出版して突如浮世絵界に登場し、鮮烈なデビューを果たした。大判背景に黒の雲母摺きらざりを施し、年齢による皺や、大きな鼻、釣り上がった目など、しつこい程に役者の芸質や個性をリアルに描く写楽画は、それまでの役者似顔絵の概念を根底から揺るがす前

代未聞の出来事となった。異能の絵師として、瞬く間に写楽の名は知れ渡ったが、わずか10カ月の作画期間に140点程の版画と数点の版下や扇面の肉筆画を残して姿を消すのである。綺羅星きらぼしの如く江戸中を席卷した写楽の魅力は今なお衰えることはない。

本コレクションには、衝撃のデビュー作であり、画業の中で最も傑作品を出した第一期にあたる28図のうちの6図に加え、第一期には劣るものの創意工夫を加えた優作が光る第二期となる3図の計9点が所蔵されており、いずれも写楽を語る上で欠かせないものとなっている。

浮世絵に日本の歴史の懐かしさ、民族へのいとおしさを見出し、水田がその手で愛でた、写楽をはじめとする本コレクションが、本学の歴史とともに歩み、引き続き、多くの学生を迎え入れ、見送っていくこととなるであろう。

表紙：マツ

マツ科マツ属の常緑高木の総称。針状の葉は真冬も青々とし、落葉しないため、日本では古くから長寿や慶賀を表すものとして尊ばれてきました。神様が降りてくる依代よりしろでもあり、お正月は新しい年の神様を迎えるために門松を飾ります。「神をまつ、まつる」が名前の由来という説もあります。

115	114	106	104	102	100	94	92	86	80	76
執筆者・出席者のご紹介（掲載順）	新会員代表者紹介	クローズアップ・インタビュー	加盟校の幸福度ランキングアップ《紅茶編》	『百人一首』の紅茶ーシンガポールの企業と共同開発ー	『百人一首』の紅茶の魅力を社会に届けたいー研究から始まる和紅茶の商品開発ー	明日への試み	私の授業実践ー教育現場の最前線からー	寄稿	ベンチャーキャピタルの設立とその成果	社会共生価値の創造を目指して
私大連ニュース	亜細亜大学／恵泉女学園大学	株式会社山上木工専務取締役	高梁紅茶との協働プロジェクトー地域とともにー	谷知子	高岡素子	関西学院大学建築学部	ケアのある学び	コロナ禍で急速に進んだ映像の教育活用	山岸広太郎	酒井克也／富田沙樹
編集後記		山上裕一朗さんに聞く	吉金優			角野幸博	益田啓裕	加藤久仁		
		（聞き手）川島葵								



140周年記念ロゴの「0(ゼロ=地球【global】)」に大学シンボルマークを重ねることで、世界に飛翔し挑戦していく明治大学の姿を示しています。長期ビジョン「国際人の育成と交流のための拠点」をイメージし、世界をリードする明治大学をシンボル化しています。



前へ

—「個」を磨き、ともに持続可能な社会を創る—

21世紀に入り、グローバル化が急速に進展した一方で、多様な価値観のぶつかり合いによる国家・民族間の相克や社会的・経済的格差の顕在化など、様々な問題が生まれ、世界は混迷を深めつつあるように見えます。日本では少子高齢化が進行することにより、新たな価値観に基づく社会システムの構築が模索されています。

こうした現代社会が抱える諸問題に真摯に向き合い、グローバル・パートナーシップを醸成して問題解決への取り組みを重ねることによって、ともに持続可能な社会を築いていくことが、いま求められています。

そこで重要になるのは、一人ひとりが人類の英知に学びながらそれぞれ個性を育み、多様な個性を尊重しつつ、社会のあらゆる場面で協同することを日常化することです。

明治大学は、2031年に創立150周年を迎えます。これまで、建学の精神である「権利自由、独立自治」を体現した多彩な人材を輩出してきました。

これからも、多様な「個」を磨き、自ら切り拓く「前へ」の精神を堅持し、社会のあらゆる場面で協同を進め、時代を変革していく人材を育成します。

これら人材の育成に必要な教育の基盤は研究、すなわち知の創造にあります。各専門分野を牽引する独創的研究を推進するとともに、学際的・国際的連携によって知の厚みを蓄え、新たな課題に挑戦します。

建学の精神を体現した人材の育成と知の創造を通して共創的未来へと前進します。

和泉キャンパスに新校舎



「ラーニングスクエア」2022年春竣工

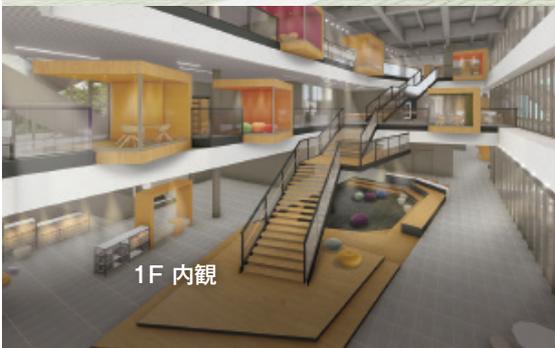
明治大学は、社会の激しい変化に対し、総合的な知の基盤である「教養教育」を展開する場の創出に向け、文系6学部※の1・2年生が通う和泉キャンパスに新校舎「ラーニングスクエア」を2022年春に竣工します。

学生の学修や居住環境を考慮し、アクティブラーニングスペースや学生の憩いの場となる「グループボックス」(少人数

学習ユニット)などの新しい教育空間を積極的に取り入れ、学生の主体的な学びが生まれる工夫がなされています。

※ 法学部、商学部、政治経済学部、経営学部、文学部、情報コミュニケーション学部

【建設概要】 建物名称: 和泉ラーニングスクエア (Izumi Learning Square) / 構造: S造(鉄骨造) / 建築階数: 地上8階 / 延床面積: 12,240.67㎡(今後、変更となる可能性があります) / 建設位置: 第二校舎の南側[国道20号(甲州街道)側] / 収容施設: 教室、ラーニング・コモンズ、講師控室、共用施設等 / 竣工時期: 2022年3月(予定)



1F 内観



1F 大教室(兼ホール)



2F グループボックス



明治大学 子どものこころクリニックを開院



心理臨床センターは2021年1月「明治大学子どもこころクリニック」を駿河台キャンパス・研究棟に開院し、児童精神科の診療を開始しました。診療科目は児童精神科、精神科、心療内科で初診時に3歳～15歳の子どもとその家族が診療対象となります。

クリニックは地域に開かれた保健医療機関であるとともに、来院者の同意を得た上で研修生が同席するなど、大学院文学研

究科臨床人間学専攻の学生や、文学部心理社会学科臨床心理学専攻の学生に臨床実習の機会を提供し、臨床心理士・公認心理師を目指す学生の研修機関として役割を果たしていきます。

クリニック開院は、大学創立140周年の取り組みの一つとして位置付けられ、本学の歴史に新たな一歩が刻まれました。

[<https://www.meiji.ac.jp/mhc/>]



世界に目を向け 逆境を乗り越える「個」であれ



新型コロナウイルスの影響で社会の在り方が大きく変化の中で、人との接触が制限され、生活様式が変化し「これからどう生きるか」が見直される今だからこそ、国籍や言語、文化、宗教、価値観を越えたつながりを持ち、協力してグローバルな課題に立ち向かい、解決する力が求められていると、本学は考えます。

視野を広げ、世界中に目を向けることでこそ、先を見据えた思考ができます。本学の使命は、常に未来を予想し、次代の社会をリードする人を生み出すこと。コロナ禍を新たな挑戦の機会ととらえて、直接の海外訪問が難しい状況においても世界とつながり続け、いかなる状況も乗り越える発想力、行動力を明治大学で身につけてほしいと願っています。

University Current Review

大学時報

2022.01 / NO.402



私学の使命

大六野耕作 明治大学長

自ら問題を発見・分析し、その解決を図る能力を育む教育が喫緊の課題だといわれてきた。グローバル化が深化する中で、多様な価値観や文化的背景を理解し、相互に議論し、解決に至る能力がこれまで以上に必要なことも自明だ。しかし、現在、その多様性と自律性を基盤とする協創的な教育を、画一的に実施しようとする傾向がみられる。それぞれに異なった建学の歴史と理念を持つ私学こそ、多様な価値や文化を育てる時代の先導役になるべき時ではないか。

日本の私立大学の責任——コロナ禍を越えて——

田中 愛治

日本私立大学連盟会長、早稲田大学総長



新年おめでとうございます。本年の本連盟の加盟各大学のご発展と、各大学関係者の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

2022年もコロナ禍が収束する可能性は低く、我々の対応は続くと思われる。コロナ禍を通して、私たちは多くのことを学びました。ここでは、それらの中から日本の私立大学がこれまで以上に覚悟を持って取り組むべき4つの点を述べたいと存じます。

第一に、コロナ禍は、より弱い人々に、より苦しい環境をもたらしました。健康に不安のある方、所得が高くない方、教育機会に恵まれない方、それぞれの社会の少数派の方々ほど、コロナ禍により過酷な状況に追い込まれております。これに対して、日本の大学、特に私立大学は、厳しい環境の中でも学びたいと望む学生にも目を向けて、教育環境を整えねばなりません。そのためには、学修者本位の教育内容、教育環境の提供を心がけるべきであると感じております。こうした意味で、私たちがしばしば用いてきた「教育効果を上げる」という表現も、学生が「より高い学修効果を上げることのできる教育環境を提供する」と言い換えるべきであると考えております。

第二に、コロナ禍は、私たちに正解のない問題を突きつけました。顧みればコロナ禍だけでなく、近年に人類が直面した大きな問題は、世界中で誰一人正解を知らない問題ばかりです。地球の温暖化に起因する気候変動、国家間ならびに各社会における格差の拡大、民族間の紛争など、どれを取っても解決策が直ちには見い出せない問題です。こうした未だ正解のない問題に対して、自分なりに解決策を考え、仮説として提示し、その妥当性を何らかの根拠で

示し得る人材が必要です。さらに、もし自分の考えでうまく解決しなければ、一からやり直す知的な勇気のある人材を育成する必要があります。

第三に、コロナ禍は、世界中のデジタル・トランスフォーメーション(DX)を加速しました。対面による交渉や相談ができない状況下において、人間の活動の様々な局面でDX化が加速しています。日本は、1990年ごろまでは、PISSAの調査において、高校生の学力が世界でトップでした。そのため日本の大学生は、学生時代には課外活動を存分に楽しみ、人間関係における調整力とコミュニケーション能力を高めれば良いという時代が、1990年代初頭のバブル経済崩壊まで続いていました。その証拠に、世界における日本の産業競争力も、1990年代初頭までは世界一でした。しかし、バブル崩壊後は急速にその地位を下げ、2020年には世界34位にまで低下しています。今こそ日本の大学生の八割が学ぶ私立大学の教育を底上げする必要があります。正解のない問題に対する解決策をデータなどの客観的な根拠を示して検証するデータ科学の考え方は、文系の学部生といえども学ぶ必要が出てきています。こうした意味で、日本の私立大学の果たすべき役割は、より大きくなっていると感じております。

第四に、コロナ禍により、学生から学費をいただいている大学の責任を今まで以上に自覚させられました。私立大学は、コロナ禍のもと厳しい環境で学ぶ学生からいただく授業料に見合う、学修効果の上がる教育を提供していく責任があります。すなわち、それぞれの私立大学は、学費収入を何に使って良いのかについて常に考え、その考え方を私立大学の最も重要なステークホルダーである学生ならびに保護者の皆様に、理解されるよう説明する責任を負っているという自覚が必要なのです。したがって、ガバナンスの透明性と公正さをより積極的に学外に示していく必要があると考えております。

日本私立大学連盟は、加盟される各大学と共に、日本の私立大学を支え牽引していく覚悟で必要な改革を進め、日本の私立大学生を、日本の地域社会、そして日本全体に、さらには世界人類に貢献できる人材になるように、育て参りたいと存じます。加盟大学の皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

工学教育への想い

山田 純 芝浦工業大学学長

はじめに

日本の産業は昭和、平成を通して大きく変化してきた。高度経済成長期においては、自動車や家電などの飛躍的な需要の伸びに後押しされて、それら最終製品を製造するメーカーが躍進を続けてきた。大学における工学教育は、それらの産業を担う工学系技術者を輩出し、その躍進を支えてきた。しかしながら、今や日本の産業構造は大きく変化しており、これまでの工学教育が、この変化に対応できていないと言われ始めている。

2017年6月に文部科学省「大学における工学系教育の在り方に関する検討委員会」がとりまとめた「大学における工学教育の在り方について(中間まとめ)」において、産業分野の急速な進展に対応できる工学系人材の育

成が求められていることが示された。その求めに応じるための具体的な施策として、2018年3月、「工学系教育改革制度設計等に関する懇談会」が、その「取りまとめ概要」の中で、大きく4つの提言を行っている。そこには、情報教育を含む工学基礎教育の強化に加えて、学科ごとの縦割り構造の抜本的見直しや、学士・修士の6年一貫教育体制の構築などがあげられている。芝浦工業大学では、このような社会の要請に応えるべく、学科に代わる課程制導入の検討を開始している。本稿では、課程制導入によって解決したい、解決すべき課題について述べたいと思う。

1. 芝浦工業大学の状況

芝浦工業大学には、工学部、システム理工学部、デザ

イン工学部、および、建築学部との4つの学部がある。デザイン工学部と建築学部にはそれぞれ1つの学科が置かれており、その名前が示す分野の教育を行っている。一方、工学部とシステム理工学部には、それぞれ、9学科1課程と5学科が設置されている。

現システム理工学部は、約30年前の1991年にシステム工学部として設立された。その設立の理念は極めて先進的であった。当時より、工学系教育の縦割り構造に問題意識を持っており、分野横断を意識したカリキュラムをもって教育を行ってきた。「どんな製品であっても、それを生み出すためには、専門分野の異なる技術者の協働が必要である」という考えに基づいてカリキュラムが設計されている。そのカリキュラムには、学科を超えて学生グループを組織し、一つの課題に取り組むというユニークな科目もある。設立の理念を具現化するための工夫が随所に見られる。システム理工学部は、先の懇談会の提言を、一部先取りできていると言える。

一方、工学部は昔ながらの分野縦割りのカリキュラムとなっている。まさに、「大学における工学系教育の在り方に関する検討委員会」において指摘された通りの状況にあ

る。例えば、機械系の学科であれば、昭和以来、そのカリキュラムに大きな変化はない。平成も過ぎ、令和の時代に入り、産業構造も大きく変化した今、工学部でも時代に合ったカリキュラムを考える時期に来ていると思う。しかしながら、先の懇談会が提言するような大きなカリキュラム改革には、抵抗も少なくない。

2. カリキュラムの硬直

産業構造が著しく変化する時代にあつて、大学の教育カリキュラムが変わらない原因は何か？おそらく、教員が自ら学んだカリキュラムを大切に想う気持ちにあるようだ。○△工学の体系に基づいて、それぞれの分野のカリキュラムは構築され、長い間、大学における教育を担ってきた。それを安易に、あるいは、拙速に見直すことに不安があるのだろう。この点は理解できる。しかし、それらのカリキュラムが設計された時代と今では、社会背景が全く異なっている。この点にもっと目を向ける必要があるように思う。次のような例がある。

今の時代になじまなくなったという理由で、ある科目を削減したいと提案されることがある。その提案に対して、

「その科目での学びが役立つ学生もいる。削減には反対！」との意見が出されることは多い。理解できる面もあるが、その科目を残すことによって、今必要な科目を設置できないという現実がある。私としては、これまでのカリキュラムを大切に想い、それを維持したいという考えは尊重するが、以下に述べるような解決すべき課題があると考えている。

3. カリキュラム硬直の弊害

これまでのカリキュラムの維持が念頭にあると、ある分野の教員が定年退職した際、その教員が教えていた科目を引き継げる教員（研究者）を採用したいと考えてしまう。教員採用にあたって、新しい産業分野を専門とする研究者が応募してきても、担当してほしい科目に合わないという理由で、採用候補から外されることが多い。それだけでは、十分に成熟した分野では、若い研究者がいなくなっており、教員公募をしても応募がないということも起こっている。何とかその分野の研究者を探しだし、採用できたとしても、産業界が求める分野の研究ができないばかりか、その分野の人材も輩出できなくなる。

4. 希薄な問題意識

カリキュラムを見直さなくても、今でも十分に優秀な卒業生を産業界に輩出できているという意見がある。産業を支える技術者を輩出できているのは、教員がその時代の要請に合った研究を行っているからである。もう少し詳しくいうと、大学の理工系学部でほぼ必修となっている卒業研究のおかげである。学生は4年生になると教員の研究室に所属し、教員の研究プロジェクトに参画する。これを卒業研究と呼ぶが、学生はこれを通じて、カリキュラムには現れない技術者としての学びを広め、深める。社会の要請や時代に合った研究テーマを設定できる教員は、このせいで、これまでのカリキュラムでも困らないと考えるのではないだろうか。ただ、そうでない教員の研究室では、学生が学ぶチャンスを逸してしまう。

5. 硬直化する学科組織

学科組織そのものにも課題があるかもしれない。学科は大きな組織とは言えない。本学での教員定員は約15名である。一般の会社組織のように、教員には配置転換がない。学科の人間が入れ替わるのは、ほぼ定年退職を迎えた場

合に限られる。一度学科に所属すると、定年になるまでメンバーは大きく変わらない。そのせいで、学科は村社会化していく。この村社会では、教員の年齢からくる序列もあり自由闊達な議論はしにくい。極めて保守的で排他的な組織が形成される。学部あるいは大学からの要請があっても、学科内に波風は立てたくない、学科を今あるままに維持しようとする心理が働いてしまう。硬直化しやすい学科の組織構造が、新しい時代への対応を難しくさせている。

6. 組織・カリキュラム改革の方向

芝浦工業大学工学部では、2024年、学科組織に代わる「課程制」の導入を計画している。そして、それを機に、以上述べてきた課題の解決を目指す。改革のポイントは以下の4点である。

① 学科組織を無くし、教員は学科ではなく学部 to 所属する。
② 学生は課程（あるいは、その中の「コース（仮称）」）に籍を置く。教員はその課程（あるいはコース）を担当し、そこに籍を置く学生の教育に責任を持つ。

③ 課程（あるいはコース）のカリキュラムは、一つの分野だけでなく他分野を学ぶことのできる柔軟性を有するものとする。

④ 卒業研究を4年生で実施するだけでなく、3年生まで拡張する。

教員所属を学部とすることで、人事を学科でなく学部主導で実施することができる。学科が提供する科目に縛られることなく、大学の方針や社会の要請に沿った人事が可能となる。学生は、広く興味を持った分野を、自身の所属する課程に留まらず、比較的自由に学ぶことができる。さらに、卒業研究を早期に実施することで、学生はそれを通して、より実践的な学びができる。

まとめ

この組織・カリキュラム改革の実現には、以上述べてきた課題以外にも、解決すべき課題は多い。例えば、学科が担っていた研究組織としての一面が失われてしまう。学科でまとまって行っていた研究機器・施設の整備を誰が行うか、などの検討が必要である。ただし、これらはテクニカルな課題であり解決できると思っている。